

はじめに

2011年東北地方太平洋沖地震(M9.0)は今年(2018年)の3月11日で7周年を迎えます。護岸工事や盛り上げ工事など大規模な工事が進み、遅れていた被災者用住宅も徐々に出来上がってきたとの報道がありました。また大きな被害をもたらした津波についても研究が進み、北上川などの河川の上流に予想を超える津波が押し寄せたことが TV で報道されていました。東北地方太平洋沖地震の余震もまだ発生しています。また地殻変動においても、地震後に続く余効変動が今だに顕著であると報道されています。このようにこの地震は、震源域の東北地方及びその太平洋沖だけでなく、日本列島の広域な地殻に大きな変動を与えて、現在もその変動は進行中です。この地殻変動の影響かどうかは不明ですが、2016年4月16日に熊本地震(M7.3)が発生し、九州に甚大な被害を与えました。このように日本列島の地殻活動は大変活発で、それを調べることは重要であることは言うまでもありません。東濃地震科学研究所はこの熊本地震の震央から約 650km も離れていますが、この地震が発生する以前に設置した研究所独自のボアホール型の高性能歪計・応力計や地震計によって、大変貴重な観測データを得ることができました。東北地方太平洋沖地震の時と同様に、これらのデータを活用し、この地震が地殻に及ぼす影響を解明することは当研究所の世界的に誇るべき業績となることは疑いありません。しかしこのような先端的な研究を1研究所の研究者だけでできるものではなく、また多くの最新研究情報の交換も必要であることから、研究交流の場として、平成29年度も2回の地殻活動研究委員会が開かれました。

委員会では多岐に渡って研究が発表されましたが、トピックスとして東北地方太平洋沖地震や熊本地震と関連する研究発表がやや多かったです。東北地方太平洋沖地震に先行する地殻変動の研究や、この地震で **stress shadow** にも拘わらず誘発された群発地震の研究などの発表がありました。また熊本地震とその後の水圧および応力変化についての発表もありました。これらの研究発表はお互いの研究に大きな刺激を与えたものと思われます。これからも本研究所において、皆様方にもご協力いただき、地殻活動の研究が強力に推進されますことを願っております。

東濃地震科学研究所 地殻活動研究委員会委員長 鈴木貞臣